

論文の和文要旨

論文題目	同時バイリンガルの言語使用 ー日本語と英語を話すカナダの子どもたちの場合ー
氏名	時田 朋子

第1章「問題提起」では、本研究を行う背景を説明した。今日、国際結婚や異民族間結婚をする人々が増加している。これらの人々が親になる時、子どもに2人の親の母語を習得させようとするのは少なくない。そこで彼らは子どもにそれぞれの母語で話しかける。その結果、生まれてから同時に2つの言語に接触する子どもが増加している。母語を2つ持つこの子どもたちは、「同時バイリンガル」と呼ばれる。

本研究は、同時バイリンガルの子どもたちがいかに言語を使用するかを扱った。このテーマを扱った先行研究の多くは、この子どもたちが母語を2つ持つという点に注目し、第一言語習得期の2-4歳の子どもたちの言語使用を分析する。しかし、その次の成長段階である学齢期の子どもたちを対象にした研究はほとんどない。小学校に入学することにより、子どもの日常における言語環境は大きく変化することから、この年齢の子どもたちを研究する必要がある。そこで本研究は、学齢期前後の同時バイリンガルの子どもの言語使用を扱うこととした。

バイリンガルの言語使用については、統語的観点、社会言語学的観点から研究が進められてきた。なお、社会言語学的観点は、言語選択および語用論に分けられる。そこで、本研究もこれらの観点から、同時バイリンガルの子どもたちの分析を行う。さらに、対象が学齢期前後の子どもたちであることを考慮し、言語教育的観点からの分析も行う。

第2章「調査方法」では、分析のために行った調査の詳細を述べた。家庭における家族の自然会話（各家庭1-1.5時間）を収集し、コーパス化した。被験者は、4家庭6人の就学前後の子どもである。この子どもたちは、バンクーバーで生まれ育つ、英語と日本語の同時バイリンガルであり、父親はカナダ人の英語母語話者、母親は日本人の日本語母語話者である。バンクーバーは英語圏であることから、社会におけるマジョリティ言語は英語、マイノリティ言語は日本語であり、かつこのバイリンガリズムは家庭でのみ展開される。

第3章「統語構造：コードスイッチング文生成の原因解明に向けて」は、統語的観点から分析をした。バイリンガルは、一文の中に二言語を用いる「文内コードスイッチング (Intrasentential code-switching)」をよく行う。そこで、同時バイリンガルの子どもたちほどのような文内コードスイッチングを行うかについて、その特徴を分析することとした。代表的な先行研究として、Poplack (1980) がある。この研究は、各言語の統語規則を破壊しない箇所でもコードスイッチングが起こるとする「等価制約」を提唱した。つまり、コードスイッチングは、各言語の文法的まとまりを単位とする。その後、Joshi (1985) は、文内コードスイッチングに使用される言語は文法的なフレームを構成する「基盤言語 (ML)」と、埋め込まれる「埋込言語 (EL)」に分けられると述べ、文における二言語の役割が異なることを示した。Myers-Scotton (1992) は、Joshi (1985) を拡張し、「基盤言語フレームモデル (Matrix Language Frame Model)」を提唱した。このモデルの特徴は、MLは①文の語順を決定し、②主部と外的な文法関係をもつシステム形態素に使用されることを示したこと、およびELをひとつの形態素からなるタイプと、複数の形態素から成りEL言語の統語構造を含むタイプ「ELの島」に区分したことである。さらにLevelt (1989) を参考に、Myers-Scotton & Jake (1995, 2001) は、「4-Mモデル」と「抽象レベルモデル」を提唱し、話者の発話意図が表層に出現するまでの過程においていかにコードスイッチングが起こるかを示した。以上から、コードスイッチングの単位は何か、これらの単位はいかに混合されるかが明らかにされた。しかし、なぜ文内コードスイッチングが起こるかは解明されていない。そこで、本研究は、同時バイリンガルの子どもたちの文内コードスイッチングの特徴を記述するとともに、なぜ文内コードスイッチングが起こるかを考察することとした。

学齢期前後の同時バイリンガルの子どもたちの文内コードスイッチングの特徴として、①発話に占めるコードスイッチング文の比率は低い (4.1%)、②9割は、「MLが日本語・ELが英語」のパターンである、③ELの方がELの島より多い、④EL・ELの島は、名詞・名詞句であることが多い、⑤EL・ELの島は、意味的にEL言語と結びつきが強い名詞・名詞句である、ことが見出された。これより、文内コードスイッチングは、バイリンガルが、二言語に中立的に語彙を持っていないために起こると説明できる。ELとのみ結びついた語彙は、MLで文が構築されていてもELとしてそのまま表層に出現してしまう。その結果、コードスイッチング文が生成されるのである。

第4章「言語選択：二言語を用いたコミュニケーションストラテジー」は、社会言語学的観点からの分析である。バイリンガルは、2つの言語能力を持つが、意識的に言語を使い分ける。そこで、何が言語を選択させ、言語を替えさせるのか、その要因を見出すこととした。

バイリンガルは、発話外的な状況を考慮し、言語選択を行う (Fishman, 1965)。二言語が使用される家庭においては、「聞き手」に応じて言語選択をすることがこれまで指摘されてきた (ex. Yamamoto, 2001)。次に、言語を替えることであるが、聞き手が同じ二言語を習得している場合、発話外的条件が同じであっても、コードスイッチングが起こる。これまで、会話機能の観点から分析が行われてきた (ex. Grim, 2008)。

しかし、先行研究は、言語発達段階にある学齢期前後の同時バイリンガルの子どもを直接分析していない。さらに、言語選択においては「聞き手」以外の要素はないのか、コードスイッチングにおいては会話機能以外の観点はないのか、という課題が挙げられる。そこで、これらの点を解明しながら、子どもたちの言語使用のメカニズムを明らかにすることとした。

まず言語選択についてであるが、学齢期前後の子どもたちは、「聞き手」に応じて言語を選択するとともに、「会話参加者」を言語能力の観点から考慮していることが見出された。

次に、コードスイッチングは、まず談話構造の観点より、文脈の一貫性を維持するために行われていることが見出された。具体的には、①直前の相手の発話の繰り返し、②別の言語を用いて介入する第三者への対応、③使用している言語で表現できない語彙・表現の補完、④相手からの指示への対応、として行われていた。それから、会話構造の観点より、隣接ペアの視点を用いてコードスイッチングを分析した。まず、相手に働きかける機能をもつ第一ペアにおいては、「聞き手に依頼する」、「聞き手の関心を引く」、「聞き手に期待する」という機能に伴い、コードスイッチングが行われていた。このコードスイッチングは、英語から日本語へという方向性で起こる。次に、相手への応対をする第二ペアにおいては、「同意する」、「主張する」、「否定する」という機能に伴い、コードスイッチングが行われていた。「同意する」に伴うコードスイッチングは、英語から日本語へという方向性で、「主張する」、「否定する」に伴うコードスイッチングは、英語から日本語へという方向性で起こる。これより、コードスイッチングの言語的方向性は「アコモデーション」と結びつき、

相手と同じ言語へのコードスイッチングは相手への「収束」を、異なる言語へのコードスイッチングは相手からの「拡散」を強める (Giles, et al., 1977) 機能を含むことが見出された。

以上、子どもたちは、社会的相互行為としてよりよいコミュニケーションを構築するため、2つの言語能力をコミュニケーションのための「ストラテジー」として使い、言語を使い分けていた。

第5章「言語発達：家族の言語使用パターンが、子どものマイノリティ言語能力に及ぼす影響」は、言語教育学的観点からの分析である。同時バイリンガルの子どもたちは、マジョリティ言語の能力は年齢とともに発達させるが、使用されるドメインが限られるマイノリティ言語の能力は概して低い。さらに、マイノリティ言語の能力は個人によっても異なる。そこで子どものマイノリティ言語の能力何が影響を与えるのか、その要因を見出すことを目指した。それは、同時バイリンガルの子どものマイノリティ言語をいかに発達させるかを考察することでもある。

各親がそれぞれ自分の母語で子どもに話す方法を「1親1言語アプローチ (One Parent – One Language Approach)」と呼ぶ (Barron-Hauwaert, 2004)。このアプローチを子どもの言語発達に結びつけるために、マイノリティ言語話者の親ができる限り子どもにマイノリティ言語で話すこと (ex. Yamamoto, 2001; Barron-Hauwaert, 2004) や、親が子どもにマイノリティ言語を教え、子どもに同言語を使用させる環境を作り出すこと (ex. Döpke, 1992; Lanza, 2004; Mishima, 1999) の必要性がこれまで指摘されてきた。しかし、各研究は子どものコミュニケーション活動を包括的に検証しておらず、また子どもの発話そのものを分析していない。そこで本研究は、家庭におけるコミュニケーション活動がいかに子どものマイノリティ言語の能力と結びつくかを考察した。

まず発話より判断した日本語能力および就学状況に基づき、6人の子どもを3グループに分けた。その後、言語活動と結びつけ、検証した。親はすべての子どもに1親1言語アプローチを実践しており、親からの直接的な日本語の受容は同じであった。しかし、間接的なマイノリティ言語の受容は、就学児の言語能力に大きな影響を及ぼすことが見出された。両親間で日本語を使用する家庭の子どもの方が、日本語能力が高かったのである。さらに兄弟姉妹がいる場合、日本語話者の母親と兄弟姉妹が日本語を使用する子どもの方が、日本語能力が高かった。また、母親は子どもに日本語を使用させようとさまざまなストラテ

ジーを用いるが、それは直接的にマイノリティ言語能力の違いに影響してはいなかった。

以上から、マイノリティ言語能力の発達には、未就学児の場合、子どもと多くの時間を過ごす親がマイノリティ言語話者であれば1親1言語アプローチを用いれば十分であるが、就学児の場合、家庭においてマイノリティ言語に接触することが必要であることが見出された。つまり、子どもがマイノリティ言語の能力を発達させるためには、家庭がマイノリティ言語使用環境となることが求められるのである。

第6章「結論」では、本論文をまとめた。それから本研究の今後の課題として、同時バイリンガルがいかに関「生活の中で」言語を使用するかを捉えるか、さらにその次の年代に当たる「思春期」の子どもたちがいかに関言語を使用するかを挙げた。